

適期に適量の追肥と赤かび病防除を確実に実施！

令和6年4月 1日
新潟農業普及指導センター

📌 ここがポイント！！

- ◎生育量により止葉抽出期に追肥を実施する。
- ◎小麦は穂揃期追肥を必ず実施する。
- ◎赤かび病防除は、開花期とその7～10 日後の2回を確実に実施する。

1 生育状況

・播種時期の早晩や播種様式による生育差があるが、越冬状態およびその後の生育は順調である。ただし、越冬後、低温傾向で推移し、茎立期は大麦で平年に比べ2日程度遅れている。

表1 麦の生育状況(調査日:3月14日頃)

区分	調査地点	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (L)	葉色 (SPAD 値)	茎立期
大麦	秋葉区	16	775	8.6	43.5	3月26日
	北区	11	768	8.5	35.7	3月28日
小麦	秋葉区	15	714	8.8	36.9	—
	北区	14	1,134	10.3	33.6	—

※大麦 秋葉区:ゆきはな六条(条播)、北区:ミノリムギ(全面全層播)

※小麦 秋葉区:ゆきちから(条播)、北区:ゆきちから(条播)

2 当面の栽培管理

(1)止葉抽出期追肥

- ・止葉抽出期は全茎の40～50%で止葉が抽出した時期で、この時期の追肥は稔実粒数の増加、粒重の増加に効果がある(大麦はこの時期が最後の追肥となる)。
- ・大麦は窒素成分で10a当たり1～2kgを基本とし、生育に基づき加減する(表2参照)。
- ・小麦(ゆきちから等)は、窒素成分で10a当たり2kgをめやすとする。

表2 止葉抽出期の生育と窒素施用量のめやす

㎡当たり 茎数	葉色 (SPAD 値)	窒素施用量 (kg/10a)	留意点
500 本未満	45 未満	2	○砂質土壌では葉色維持のため、左記+1kgとする ○過繁茂、葉色が濃いほ場では品質低下を招くため施用を控える
	45 以上	1~2	
500 本以上	45 未満	1~2	
	45 以上	1未満	

(2)穂揃期追肥 (小麦)

- ・製パン用強力粉の原料としての小麦については子実タンパク質含有率向上のため、穂揃期(出穂期の3日後頃)に必ず窒素を追肥する。
- ・標準施用量は窒素成分で4~6kg/10a(砂質土壌では6~8kg/10a)。

(3)赤かび病防除

- ・薬剤防除を、大麦は開花期及びその7~10 日後頃の2回、小麦は開花期及びその後7~10 日間隔で1~2回(計2~3回)行う。開花期に降雨が多い場合は、感染リスクが高まるので、小麦は必ず3回防除を行う。

表3 赤かび病の防除のめやす・・・出穂期を基準にして時期を決める

区分	時期のめやす	参考
大麦	1回目:開花期(出穂期の4~7日後頃)	・出穂期とは、全茎の40~50%が出穂した日 ・出穂とは、穂の先端(芒を含まない)が葉鞘から現れた状態
	2回目:1回目の7~10 日後頃	
小麦	1回目:開花期(出穂期の7~10 日後頃)	
	2回目:1回目の7~10 日後頃	
	(3回目:2回目の7~10 日後頃)	

※農薬の使用にあたっては、登録内容を確認して適正に使用する。

※農薬ラベルに記載された、「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」

「農薬成分の総使用回数」「使用方法」を必ず確認する。



赤かび病の病斑(大麦)

○ほ場巡回による発生確認

- ・出穂後はほ場を随時見回り、変色穂の抜き取りを実施する。
- ・変色穂が比較的多いほ場(赤かび病の発生、もしくは発生が疑われる場合)は、他ほ場と刈り分ける。

農産物検査法の検査規格では、赤かび粒の混入限度が0.0%と定められています。出穂期、開花期を確認し、適期防除により赤かび病の発生を抑えましょう！